

## 高校選択時に必要とされる進路情報に関する研究

山本 奨

(2011年3月4日受理)

Susumu YAMAMOTO

### A Study on the Career Information Needed when Choosing a Senior High School

#### 問 題

中学生がキャリアについて展望する際に求められる態度や能力について、例えば中学校学習指導要領は、特別活動における学級活動の内容の「学業と進路」において、「ア 学ぶことと働くことの意義の理解」「イ 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用」「ウ 進路適性の吟味と進路情報の活用」「エ 望ましい勤労観・職業観の形成」「オ 主体的な進路の選択と将来設計」を挙げている。特にウについて文部科学省（2008）はその解説において「自己の個性の理解に基づいて、自分のよさを発揮し、個性を伸ばす進路を探索するために、当面する進路に関する情報を収集し、整理して」活用することが大切だと指摘し、その具体的な活動の一例として「学校調べ」を挙げ、「上級学校を訪問、見学したり、体験入学をして」その結果をまとめ、発表し「体験等で得た情報を整理し、自分にふさわしい進路を選択決定」することの重要性を指摘する。

そして、今日では進路指導はキャリア教育の視点で整理されることが多い（中央教育審議会、2008）。国立教育政策研究所（2009, 2010）は、中学校におけるキャリア教育の目標は「肯定的自己理解と自己有用感の獲得」「興味・関心に基づく勤労観・職業観の形成」「進路計画の立案と暫定的選択」「生き方や進路に関する現実的探索」

を挙げ、体験の重要性を指摘しながら、培う能力の一つとして「情報活用能力」を示している。

また、そこではキャリア教育が求められるようになった理由の一つとして高等学校改革の進展とその多様化が指摘されている。理数科などの「その他の専門学科」の数が増えたことや職業に関する専門学科の新設が見られること、普通科における特色あるコースの増設に触れ「高校進学だけを見ても、様々な選択肢の中から主体的に自らの進むべき道を選ぶ力を育てるキャリア教育が、ますます必要となっている」と述べている。

これらのことから、中学生がキャリアを展望するにあたり、高等学校の体験入学会（学校見学会、学校説明会を含む）に参加し、必要とする情報を獲得し、自らの個性や価値観との関係から情報を整理することは極めて重要な取組だと言えよう。同時に体験入学会による進路情報の獲得は、学校生活への適応の観点からも注目されている。文部省（1993）は高等学校中途退学問題への対応の一つとして、中学校と高等学校が相互に十分な連携をとりながら進路指導を進める必要があることに触れ、「体験入学などを積極的に推進すること」を求めている。つまり体験入学会は、中学生に進路情報を提供しそのキャリア形成に資するとともに、高校生活への適応感を向上させることを目的に実施されるものと言えよう。

しかし、実際の体験入学会は高等学校の生徒募集を目的に実施されることが多い。ある県の教育委員会は県内の高等学校で体験入学会を実施することを広報し、その目的について、「中学生が高等学校の各学科の内容をよく理解したうえで、本人の能力・適性にあった学科を選択し、目的意識をもって進学できるよう、体験入学を行っています」と説明している。しかし同県内のある県立高校では体験入学会の目的を「中学生に本校の特徴と取組を理解していただくことにより、希望進路選択の一助となる機会を設定しました。来春の本校受験につなげていただく、きっかけ作りの場となることを目的としています。」と説明している。教育委員会は進路指導・キャリア教育に資するための企画だと認識し、体験入学会を実施する高等学校は生徒募集の機会だと認識している現実が示された例だと言えよう。もちろん私立高校の体験入学会では生徒募集の要素が一層強くなると考えられよう。つまり、体験入学会でどのような情報が扱われるべきかという問題については、専ら情報を提供する高等学校側の立場から、生徒募集の効果に重きを置いて検討されてきたことになる。果たしてこれまでの体験入学会は、生徒のキャリア形成に必要とされ、また高校生活に適応するために十分な情報を、それぞれの参加者の進路情報ニーズにしたがって提供できて来たのだろうか。そもそも、生徒自身による進路情報ニーズとはどのようなものなのだろうか。情報の受け手となる生徒自身の側からの検討は十分ではなかったと言える。

さらに高等学校の多様化が進んでいる現状では、このような進路情報ニーズも学科による差異が見られるのではないだろうか。進路選択は自らの興味や適性に照らして吟味がなされることから、そこには学科やコースの特徴が反映されることが考えられるからである。しかしこのような差異については十分には明らかにされていない。

さて、それでは中学生が自らのキャリア形成と高校生活への適応のために必要としている進路情報とはどのようなものであろうか。しかしこれを

知ることは容易ではない。山本(1994, 1995)は生徒の進路に対する希望や意欲が、しばしば不安などネガティブな感情で表現されることを指摘している。まだ実現していない高校入学や高校生活を具体的にイメージして、まだ入手していない情報を特定し、これを得ようと意識することは相当に困難なことだと指摘する。そして展望が開けずに「何か不足している」と思いながらそれが特定されないとき、不安や心配が生じるとの指摘である。そうであれば、高校で学び高校卒業後の進路希望を定めた卒業間近の高校生から、高校選択時に必要とされる進路情報を聞き取ることはできないだろうか。「高校選択時にあの情報があったから正しい選択ができ、充実した高校生活を送り、次の進路を決めることができた」という満足や、「もしあの時こんな情報を得ていたら違う選択ができたのに」という後悔を背景とした情報収集である。

これらについて明らかにすることは、中学生の進路情報ニーズに有効に答え、そのキャリア形成を支援するにあたり、また高校生活への適応を支援するという観点から、有益な知見をもたらすことにつながると考えられる。

## 目 的

そこで本研究では、高校選択時にどのような情報を生徒は必要と考えているのかについて、学科による違いと高校が実施する体験入学会の効果を検討することをとおして明らかにすることを目的とする。そのために卒業直前の高校生を対象に調査を行うことにより、次の各事項について追究する。

- (1)高校生活を振り返ったとき、高校選択時にどのような情報が大切であったと高校生が考えているのかについて、その進路情報ニーズの構造を明らかにすること。
- (2)そのニーズについて、在籍した学科による異同を明らかにすること。
- (3)これらについて、体験入学会の効果との関係から検討することにより、生徒の進路情報ニーズに

応える情報提供の在り方について探索すること。

## 方法

### 1 項目収集（予備調査）

**調査対象** 公立高等学校3年生74名（男性38名、女性36名）。

**実施時期** 2008年2月

**調査手続き** 調査紙を配布しその場で回答を求めた。

**調査材料** 次の指示文により自由記述で回答を求める質問紙。

＜高校を選択するときには、その高校についてのどのような情報を得ることが大切だと思いますか。あなたの高校生活をふりかえてみて、満足できたこと、できないことに関わらずいくつでもお書きください。＞

### 2 本調査

**調査対象** 7校6学科に所属する公立高等学校3年生274名（男性143名、女性131名）。その学科については、普通科2校、工業科、商業科、理数科、音楽科、外国語科各1校であった。なお普通科の2校については普通科A、普通科Bとして区別する。普通科Aはいわゆる地域の伝統校であり「優れた進路実績」が評価されているものであった。普通科Bはいわゆる平均的な学校と評価されているものであった。

**実施時期** 2009年1-2月

**調査手続き** 調査紙を配布しその場で回答を求めた。

**調査材料**

(1)体験入学会等の参加回数

次の問により参加校数について回答を求めた。  
＜あなたは、中学生のとき、何校の学校見学会・説明会・体験入学会に参加しましたか。ひとつの高校に2回以上行った場合でも、「1校」として数えて下さい。全く参加しなかった場合は「0校」と答えて下さい。＞

(2)体験入学会等の効果

次の問により体験入学会等がどの程度役立った

のか、「とても役だった」「役だった」「どちらともいえない」「役立たなかった」「全く役立たなかった」の5段階で回答を求めた。

＜今、ふりかえてみて、いろいろな学校で経験した学校見学会・学校説明会・体験入学会は、あなたの高校選びのためにどのくらい役だったと思いますか。あてはまるものを下から選んで、番号に○印をつけて下さい。＞

(3)必要とされる進路情報

予備調査を経て作成された42項目からなる暫定尺度を用いて「とても大切」を『5』として「大切」「どちらともいえない」「大切でない」「全く大切でない」までの5段階で回答を求めた。その指示文は次のとおりであった。

＜あなたの高校生活をふりかえてみて、高校を選択するときには、下の各情報がどの程度大切だと思いますか。「とても大切」（5）から「全く大切でない」（1）までの5段階で、あてはまる数字に○印をつけて下さい。＞

## 結果と考察

### 1 項目収集（予備調査）

自由記述の回答から高校選択時に大切だと思う項目419件が得られた。これについて高等学校で体験入学会を企画する複数の担当教諭の協力の下、分類を行った。その結果、『授業』『進路』『部活動』『通学』『校則』『施設』『雰囲気』『行事』の8カテゴリーが得られた。このカテゴリーを参考に「選択できる科目や類型（コース）」「強い・活発な部活動」「生徒の卒業後の進路の状況」など42項目からなる暫定尺度を作成した。

### 2 進路情報ニーズの構造

回答に空欄が多かった被調査者のデータを一括して削除した。その結果、分析対象となった被調査者は269名（男性139名、女性130名）であった。

生徒の高校選択に係る進路情報ニーズの構造を探索するため因子分析を行うこととした。各項目の分布について検討したが、特に問題となる項目

はなかった。主因子法を用いて分析し、まず固有値の落差を参考に試みに5因子を抽出した。ここでは「42. 学校全体の雰囲気」「27. ホームルーム活動のようす」「30. 先輩のようす」などの項目では、複数の因子に一定の負荷量が見られた。弁別性の問題からこれらの項目を削除することとした。また「09. 学校行事の種類やようす」「36. 修学旅行など校外行事のようす」などは、しばしば中学生から興味をもたれる項目ではあったが、いずれの因子でも十分な負荷量を呈することがなかったため、これらを削除することとした。

残された30項目について、再度、主因子法を用いて分析したところ初期の固有値は順に、6.31, 3.20, 2.51, 1.99, 1.83, 1.22, 1.12であった。比較的顕著な落差が見られる第5因子までの回転前の累積寄与率は52.76%であった。この落差と50%超の累積寄与率を根拠とする5因子を抽出することとし、プロマックス回転を施した。そのパターン行列と因子間相関を **TABLE 1** に示した。

第1因子では、「25. 自分の将来に役立つ学校か」「38. どのような知識や能力を身につけられるか」「04. 選択できる科目や類型（コース）」などの項目に高い負荷量が見られた。これらはキャリアや進路とそれを実現させる過程や手段としての科目や知識、資格についての情報への希求に関するものだと考えられた。そこでこの因子を『進路』と命名した。第2因子では、「12. 授業の雰囲気」「10. 授業の内容」「13. 補習のようす」などの項目に高い負荷量が見られた。これらはカリキュラムの内容や高校の授業がどのようなレベルでどのように進められ、生徒がどのような雰囲気やようすでそれを受けるのかについての情報に関するものだと考えられた。そこでこの因子を『授業』と命名した。第3因子では、「29. 強い・活発な部活動」「11. 部活動の指導の厳しさ」「20. 部活動の種類」などの項目に高い負荷量が見られた。これらは部活動についての情報に関するものだと考えられた。そこでこの因子を『部活動』と命名した。第4因子では、「32. 通学にかかる時間」「14. 学校への通学方法」などの項目に高い負荷量が見られた。これ

らは当該校に入学した場合の通学条件への関心と考えられた。そこでこの因子を『通学』と命名した。第5因子では、「17. 服装規程の内容」「08. 校則の内容」「35. 生徒指導の厳しさ」などの項目に高い負荷量が見られた。これらは校則や学習の指導についての教師の指導態度に関するものだと考えられた。そこでこの因子を『生徒指導』と命名した。

各因子は予備調査を経て作成された8カテゴリーの中の5つである『授業』『進路』『部活動』『通学』『校則』とはよく一致するものと考えられた。その中の『校則』については、単に校則の厳しさを意識しているものではなく、それを運用する教師の指導態度に注目した進路情報ニーズに関するものだと考えられたのでこれを『生徒指導』に変更することとした。

その他の3カテゴリーの中の一つである『施設』については、暫定尺度作成時はこれを独立させていたが、今回の分析では授業や部活動など利用される用途に依存する情報であることが分かった。また『雰囲気』については、その意味の曖昧さから、回答した生徒それぞれが「授業の雰囲気」や「部活動の雰囲気」などと解釈し回答したと考えられた。中学生の「高校の雰囲気」との表現は、同様に、具体的な事項に焦点を絞ることができない、あるいはイメージすることができない曖昧さを意味するものと考えられた。

そして『行事』も因子として抽出することができなかった。実際の体験入学会では中学生からは特別活動の旅行的行事である修学旅行の行き先をたずねられることも多いと言う。また魅力的な行事として高校側が積極的に宣伝することも多い事項である。しかし高校生活を経てから省みると、高校選択という目的には合わない些細な情報であると認識されていると言えよう。体育的行事についても同様のことが言えよう。

さて、ここで明らかになった5因子による被調査者の進路情報ニーズの傾向については、そのニーズ間の関係を検討するために下位尺度を構成せず因子得点を用いて表すこととした。



TABLE 1 進路情報ニーズの構造（プロマックス回転後のパターン行列）

項目	因子					
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	
進路	25.自分の将来に役立つ学校か	.798	-.023	-.015	.001	-.012
	16.進路希望をかなえるのに有利になる学校か	.779	-.200	.034	.027	.119
	41.どのような進路が実現できるか	.606	.164	-.033	-.006	-.120
	07.生徒の卒業後の進路の状況	.512	-.039	-.216	-.044	.202
	38.どのような知識や能力を身につけられるか	.468	.292	.067	-.022	-.153
	04.選択できる科目や類型(コース)	.447	.111	.098	-.025	-.045
	31.どのような科目を学べるか	.446	.299	.141	.009	-.072
	22.取得できる資格・技術	.439	-.054	.111	-.003	.190
授業	12.授業の雰囲気	-.113	.703	-.037	.023	.043
	10.授業の内容	.166	.649	-.133	-.035	-.037
	13.補習のようす	-.107	.638	.046	-.030	.129
	37.どのような教職員がいるか	-.085	.599	.043	.086	-.062
	01.授業の進め方	.172	.544	-.124	-.078	.073
	28.授業のレベル	.128	.441	-.052	.160	-.070
	15.授業に関わる施設・設備	.067	.416	.104	.196	-.024
部活動	29.強い・活発な部活動	.067	-.053	.811	-.046	-.032
	02.部活動の活動のようす	.139	-.182	.776	-.010	-.069
	11.部活動の指導の厳しさ	-.120	.094	.652	-.006	.195
	06.部活動に関わる施設・設備	.026	.023	.618	.016	-.033
	20.部活動の種類	-.117	.053	.581	.066	.028
通学	32.通学にかかる時間	-.099	.096	.051	.842	.007
	23.自宅からの距離	.067	-.003	-.084	.817	.078
	14.学校への通学方法	-.010	.064	.001	.714	.008
	05.学校の場所	.011	.011	.045	.625	.017
生徒指導	17.服装規程の内容	.085	-.189	-.022	.068	.785
	08.校則の内容	.119	-.082	-.048	.167	.593
	35.生徒指導の厳しさ	-.089	.238	.003	-.115	.533
	19.学習指導の厳しさ	-.019	.343	.111	-.161	.502
	21.学校に対する社会の評判	.120	.155	.027	-.005	.394
	26.制服のデザイン	-.046	-.063	.030	.112	.392
因子間相関	No.1					
	No.2		.513			
	No.3			.232		
	No.4				.094	
	No.5					.178

### 3 進路情報ニーズの学科による異同

進路情報ニーズと学科の関係について検討するために、学科（7水準）を外部要因、因子得点（5水準）を内部要因とする学科×得点の2要因混合計画による分散分析を行うこととした。進路情

報ニーズの因子得点の各条件の平均と標準偏差をTABLE 2に示した。分析の結果交互作用が有意であった ( $F(24,1048)=3.93, p<.01$ )。

そこで単純主効果について検定したところ、『進路』『授業』『通学』『生徒指導』における学科要

TABLE 2 各学科の因子得点の平均（上段）と標準偏差（下段）

学科	<i>n</i>	進路	授業	部活動	通学	生徒指導
普通科 A	39	-.034	.005	.300	.168	.178
		.928	.958	.679	.870	.871
普通科 B	40	-.730	-.060	-.044	.005	.056
		.918	.777	.991	.954	.852
工業科	43	-.475	-.325	-.248	-.307	-.044
		1.024	1.039	1.031	.906	.863
商業科	37	-.075	-.296	.205	.290	.515
		.887	.961	.963	.721	.674
理数科	39	-.056	.170	-.134	-.144	-.528
		.827	.808	1.070	1.142	.994
音楽科	33	.453	.433	-.028	-.213	-.178
		.664	.727	.786	.878	.713
外国語科	39	.477	.162	-.022	.210	-.012
		.746	.838	.684	.837	.906

因が有意であり、『部活動』における学科要因は有意でなかった。学科間の関係についての LSD 法を用いた多重比較の結果を TABLE 3～TABLE 6 に示した。

『進路』では外国語科と音楽科は他学科に比べ有意に高いことが示され、工業科は他学科に比べ低い傾向が示された。『授業』では音楽科が他学

科に比べて高くそれに理数科と外国語科が続く傾向がみられ、商業科と工業科は比較的低いことが示された。『通学』では商業科が理数科・音楽科・工業科に比べ高く、外国語科、普通科 A がこれに続く傾向が見られた。『生徒指導』では商業科が他学科比べ高く理数科が低い傾向が示された。

また商業科、理数科、音楽科、外国語科におけ

TABLE 3 『進路』における学科間の多重比較 ( $Mse=.777, p<.05$ )

	音楽科	普通科 A	理数科	商業科	普通科 B	工業科
外国語科	=	>	>	>	>	>
音楽科		>	>	>	>	>
普通科 A			=	=	=	>
理数科				=	=	>
商業科					=	=
普通科 B						=

TABLE 4 『授業』における学科間の多重比較 ( $Mse=.802, p<.05$ )

	理数科	外国語科	普通科 A	普通科 B	商業科	工業科
音楽科	=	=	>	>	>	>
理数科		=	=	=	>	>
外国語科			=	=	>	>
普通科 A				=	=	=
普通科 B					=	=
商業科						=

TABLE 5 『通学』における学科間の多重比較 ( $Mse=.850, p<.05$ )

	外国語科	普通科A	普通科B	理数科	音楽科	工業科
商業科	=	=	=	>	>	>
外国語科		=	=	=	>	>
普通科A			=	=	=	>
普通科B				=	=	=
理数科					=	=
音楽科						=

TABLE 6 『生徒指導』における学科間の多重比較 ( $Mse=.740, p<.05$ )

	普通科A	普通科B	外国語科	工業科	音楽科	理数科
商業科	=	>	>	>	>	>
普通科A		=	=	=	=	>
普通科B			=	=	=	>
外国語科				=	=	>
工業科					=	=
音楽科						=

る得点要因が有意であり、普通科A、普通科B、工業科における得点要因は有意でなかった。得点間の関係についてのLSD法を用いた多重比較の結果をTABLE 7～TABLE 10に示した。

商業科では『進路』と『授業』が低いことが示され、理数科では『生徒指導』だけが他の進路情報ニーズに比べて低いことが示された。音楽科では『進路』と『授業』がともに他のニーズよりも高いことが示された。外国語科では『校則』と『部

活動』が低いことが示された。

『部活動』に関して学科間の差が見られなかったが、これは部活動がどの学校にもある共通の活動であり、その活動が盛んであるか否かは学科に依存しないことを考えれば当然のことと言えよう。ホームレスとの兼ね合いから比較的部活動が成立しにくいと言われる音楽科にあっても、特にその重要性が低くなる傾向は見られなかったことから、この進路情報ニーズは、学科ではなく

TABLE 7 『商業科』における因子得点の多重比較 ( $Mse=.581, p<.05$ )

	通学	部活動	進路	授業
生徒指導	=	=	>	>
通学		=	>	>
部活動			=	>
進路				=

TABLE 8 『理数科』における因子得点の多重比較 ( $Mse=.581, p<.05$ )

	授業	進路	部活動	通学
授業	=	=	=	>
進路		=	=	>
部活動			=	>
通学				>

TABLE 9 『音楽科』における因子得点の多重比較 ( $Mse=.581, p<.05$ )

	授業	部活動	生徒指導	通学
進路	=	>	>	>
授業		>	>	>
部活動			=	=
生徒指導				=

TABLE 10 『外国語科』における因子得点の多重比較 ( $Mse=.581, p<.05$ )

	通学	授業	生徒指導	部活動
進路	=	=	>	>
通学		=	=	=
授業			=	=
生徒指導				=

各校の各部活動の現状と個々の生徒の志向の間の特定の組合せにより決定されるものだと言えよう。

『進路』では外国語科と音楽科が高いものであったが、これは学科の選択が高校卒業後の進路を制限する傾向をもつための言えよう。その意味では普通科はもちろん理数科、商業科、工業科においても、その後の進路選択の自由度が高いと認識されていることがうかがわれた。

また『授業』については音楽科、理数科、外国語科において、その特殊性を事前に理解しておく必要があると認識されていることが分かった。普通科Aと普通科Bの間には差がないことから、授業のレベルに関する情報ではなくカリキュラムそのものへの情報希求であることが考えられた。専門学科では当該専門科目の単位数がカリキュラム全体の3分の1以上となることが基準とされる。しかし商業科や特に工業科ではそのカリキュラムに関する情報は他学科に比べて重要でないと認識されていることが示されたと言えよう。

『通学』及び『生徒指導』にあつては、学科ではなく各学校の特徴や指導方針に由来するものと理解された。そして普通科においてはそのA校、B校ともに、特定の進路情報ニーズに重点が置かれることはなかった。

以上のことから、進路情報ニーズの重要性につ

いて特徴的傾向を示す学科は、音楽科、外国語科、理数科などの「その他の専門学科」であることが分かった。普通科ではその傾向が見られないことが分かった。また商業科、工業科など「産業教育の振興」に係る学科では見られないことがうかがわれた。

#### 4 体験入学会の効果と進路情報ニーズの関係

次に、必要とされる進路情報が、中学生にとっての体験的機會となる体験入学会で獲得できているのかを検討することとし、まず体験入学会の効果についての間に、「とても役だった」と「役だった」と回答したものを『上群』、「どちらともいえない」及び「役立たなかった」並びに「全く役立たなかった」と回答したものを『下群』として群を分けた。この群（2水準）を外要因、因子得点（5水準）を内部要因とする群×得点の2要因混合計画による分散分析を行うこととした。進路情報ニーズについての因子得点の各条件の平均と標準偏差をTABLE 11に示した。分析の結果交互作用が有意であった ( $F(4,1068)=6.24, p<.01$ )。

そこで単純主効果について検定したところ、『進路』『授業』『部活動』における群要因が有意であり『上群』の方が得点が高かった。『通学』『生徒指導』における群要因は有意でなかった。

また『下群』における得点要因が有意であり、



TABLE11 各学科の因子得点の平均（上段）と標準偏差（下段）

学科	n	進路	授業	部活動	通学	生徒指導
上群	155	.215	.210	.131	.020	-.002
		.830	.767	.770	.933	.903
下群	114	-.292	-.285	-.178	-.028	.002
		.968	1.022	1.068	.937	.890

TABLE12 『下群』における因子得点の多重比較 (Mse=.612,p<.05)

	通学	部活動	授業	進路
生徒指導	=	=	>	>
通学		=	>	>
部活動			=	=
授業				=

『上群』における得点要因は有意でなかった。『下群』についてのLSD法を用いた多重比較の結果をTABLE 12に示した。『下群』の多重比較からは『通学』と『生徒指導』が『進路』と『授業』に比べて高いことが示された。

これらから、体験入学会を有効だと考える生徒は、特定の進路情報に偏ることなく多面的な進路情報を比較的優劣なく大切だと考えていることがうかがえた。反対に体験入学会が役立たなかったと思う生徒は、どのような授業かや卒業後の進路などの情報よりも、通学や生徒指導など生活上のようすに係る情報の方が「重要であったのに十分でなかった」と考えていることが推測された。

5 体験入学会の効果と訪問校数の関係

最後に何校の体験入学会に参加したときに体験入学会の効果を感じるのか、つまり必要な訪問校数を明らかにするために、体験入学会の効果に関する問と訪問校数の関係についてカイ二乗検定を用いて検討した。その度数をTABLE 13に示した。分析の結果、その偏りが有意であった ( $\chi^2(9) = 28.53, p < .01$ )。残差分析の結果を同じくTABLE 13中に上下の矢印で示した。「役立った」と思うとの回答は4~5校を訪問した場合に有意に多く、1校以下の場合には有意に少なかった。その1校以下の場合、「どちらともいえない」が有意に多かった。それ以外には有意な差は見られなかった。

TABLE13 訪問校数と体験入学会の有効性の関係

訪問校数	体験入学会の有効性			
	役立たなかった 全く役立たなかった	どちらともいえない	役だった	とても役だった
0-1	10	29 ** ↑	13 ** ↓	4
2-3	16	27	57	15
4-5	5	19	43 ** ↑	5
6-10	3	5	13	5

残差分析の結果：↑は有意に多いことを，↓は有意に少ないことを表す。 \*p<.05 \*\*p<.01

このことから、中学生が有益な進路情報を得るためには、4～5校の訪問が必要であると考えられ、1校以下では有益な進路情報を得られていないようすがうかがえた。また6校以上の訪問ではその回数に見合う効果が得られず、必ずしも多ければ多いほど良いとはいえないことが示されたと言えよう。

## 6 総合的な考察

本研究は高校選択時の進路情報ニーズについて、その構造の探索と学科による異同や体験入学会の効果との関係から追究したものである。

高校生活を経験した後に、生徒が高校選択時に必要であったと考える進路情報ニーズは次のとおりであった。①その高校がどのようなカリキュラムをもち、授業がどのように進められるのか。②その学科特有の卒業後の進路とはどのようなものであるのか。③入学後どのような部活動に所属し活動することができるのか。④通学に支障はないか。⑤教師の指導態度はどのようなものであるのか、の5点である。そして、音楽科、外国語科、理数科など「その他の専門学科」と呼ばれる学科では、①の授業と②の進路について、特に顕著であることが分かった。

実際の体験入学会では、学校の特徴が説明され模擬授業や部活動が体験されることが多いが、このことから模擬授業ではカリキュラム中の位置づけを理解させながら体験させることが重要だと言えよう。高校が宣伝する進路実績については、いわゆる進学校と平均的な学校間に差異が見られなかったことから、必要とされる進路情報でないことがうかがわれた。むしろ音楽科や外国語科など、卒業後の進路が特徴的な傾向を示す学科において、その必要が認められたと言える。そして体験入学会では、しばしば学校側から施設設備の宣伝がなされるが、これらは授業や部活動などの活用との関係から提供されるべきものであることが示唆された。また中学生が学校行事について興味をもつことも多いが、このような具体的で分かりやすい情報は、充実した高校生活を送るために有益

なものとは認識されていないことが分かった。反対に学校の雰囲気やようすなど抽象度の高い情報は、学校生活を具体的にイメージできない場合の表現であることが考えられた。過度に具体的な情報も過度に抽象的な情報も、キャリア形成上、また学校適応上有益なものとしてはたっていないことが示唆されたと言えよう。

その上で上記の①から⑤までの進路情報ニーズは、偏ることなくいずれも重要だと考えられていることが示された。今回の結果は、これらについて優先順位を付けることを否定するものではなかったが、各側面を多面的に吟味することが重要だと生徒が認識していると言えよう。そして、その吟味を十分に行うためには4～5校程度の体験入学会に参加することが必要であることが示された。各校の情報を得た上で、各校を比較する観点を獲得し、自らの進路適性との関係から検討することが重要であると考えられた。また学校への適応の観点からは④の通学条件や⑤の教師の指導態度などが関係するものと推測された。

さて、今回の研究では6学科7校を対象に調査を行い検討を行った。学科の一定の傾向を得ることができたと言えるが、一方でそれが当該学科の傾向であるのか、それとも当該校の傾向であるのか峻別できる情報を得ることはできなかった。また生徒の学校適応感や高校卒業後の進路に対する満足感との関係も、今回は検討することができなかった。これらが課題として残されたと考えられた。

## 謝 辞

調査に御協力をいただきました高校生のみならず、各校の校長先生をはじめ先生方に深謝申し上げます。

## 文 献

- 中央教育審議会 2008 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2010

- キャリア教育資料集 研究・報告・手引編〔平成21年度増補版〕
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2009  
自分と社会をつなぎ、未来を拓くキャリア教育  
－中学校におけるキャリア教育推進のために－
- 文部科学省 2008 中学校学習指導要領
- 文部科学省 2008 中学校学習指導要領解説特別  
活動編
- 文部省初等中等教育局長 1993 高等学校中途退  
学問題への対応について（通知）
- 山本奨 1994 高校生の進路に対する不安の諸相  
－自由記述の検討－. 日本学校教育学会第9回  
研究大会（於筑波大学）発表要旨集, pp.46-47
- 山本奨 1995 進路に対する不安と進路について  
の援助－高校生を対象とする測定の試み－. 日  
本学校教育学会第10回研究大会（於上越教育大  
学）発表要旨集, pp.20-21